

シンポジウム

[SY4] クリティカルケア領域で「働く看護師の育成－エキスパートの役割 機能を活かした全人的な育成のワザ」と実践－

企画:川島 孝太 (りんくう総合医療センター)

[SY4-1]組織の課題に対して取り組むスタッフ+CNSの教育的な思考と実践

○北別府 孝輔¹ (1. 大原記念倉敷中央医療機構倉敷中央病院)

キーワード: 専門看護師、教育、実践

ICUという組織に属するスタッフでありながら専門看護師としても活動している自身の発言や行動、臨床看護実践の多くは意図的であると自覚している。ベッドサイドでの患者に対する直接ケアでは、そのすべてがOJTという教育の場であることを認識して、患者への質の高い看護提供を通じた後進育成として教育的な狙いをもって実践している。特に、スタッフ+専門看護師としてマルチタスクを抱えている状況下でのOJTの場は大変貴重で、ひとつひとつの行動の意味付けや思考をICUスタッフと直接共有し、議論し、時には反復できるとても有意義な時間である。体位変換や吸引などの基礎看護技術ひとつとっても、患者個々の顕在的もしくは潜在的な問題に合わせた思考を有しているため、それらを共有することの積み重ねは、ICUという組織における質の高い看護の醸成に繋がると信じている。

また、専門看護師は「実践」「相談」「調整」「倫理調整」「教育」「研究」という6つの役割を担っているが、ひとつひとつが区切られた役割ではなく、すべてに教育的な思考を有している。ICUという組織以外での役割を発揮する場面でも、その組織の課題を分析し、症例に応じた役割機能を発揮する中で組織の課題に対してアプローチをしている。例えば「相談」であれば、困難な症例に対してコンサルティとともに、もしくはコンサルティが中心になってアセスメントや実践をおこない、次に同様の症例に対峙した際には問題解決能力が備わっていることを目指して介入している。実践していることはまさに教育的な内容も含まれており、「相談」という文脈の中には実際に教育という言葉も存在している。「調整」「倫理調整」「研究」という役割も同様である。それら単独の役割にとどまらない教育的な思考が存在している。

「教育」という役割のみで語るとするならば、その範囲は多岐にわたる。あくまで組織の課題に対してアプローチをしているので、組織に求められているタスク（例えば院内のフィジカルアセスメント教育、特定行為研修など）にとどまらず、専門看護師自身が課題を探索し、必要と判断すれば教育プランをもったうえで組織に申し入れをおこなっている。専門看護師自身が中心となっておこなっている教育的な活動としては、ICUに対しての「中堅看護師教育」、「QIに関する活動」、院内全体での「RRSにおける急変前対応研修」、「RRS症例の振り返り会」、「インストラクショナルデザイン研修」、「療法士の吸引プログラム」などがある。いずれも、組織の抱えている課題が解消されて看護の質が向上するために、能動的に学習できる組織文化の醸成のために、ひいてはそれらの恩恵を受ける患者家族のためにおこなっていることである。ただ、これらの活動も臨床現場での行動レベルがどう変わっているかを評価しなければならないため、その部分に関しては課題であり日々模索しているところである。

このように、ICUに所属するスタッフ+専門看護師として、クリティカルケア領域で働いている看護師や一般病棟でクリティカルな状態にある患者を支える看護師の育成に日々注力している。シンポジウムでは、これらの教育的な思考と実践をより言語化しながらディスカッションを深めていきたいと考えている。